

## ラサン体制（一七〇五—一七二七）

### の構造とその解体過程について

手塚利彰

はじめに

一、ラサン体制の構造

二、一七二七年以後のラサン体制

おわりに

### はじめに

十七世紀前半のチベットでは、ウィを中心とするゲルクパ支持勢力とツァンを中心とするカルマパ支持勢力の抗争が続いていた。ゲルクパを信仰するグシハンは、一六三六年からホショート部やジュシガル部を率いて敵対勢力の平定に着手し、一六三七年に青海、一六四〇年にカム、一六四二年にツァンを征服して、「唐古特四大部落」すなわちチベット全土を「奄有」した。<sup>①</sup>その間、一六三九年までに、ホショート族のうちグシハンに従う者がイリから青海を中心とした地域に移住し、青海ホショート部が成立している。<sup>②</sup>グシハンは青海征服後ラサにのぼり、ダライラマから王を意味する「ギャルポ」<sup>③</sup>の称号を受けたが、ツァン征服後あらためて「チベット三州 chöl ka gsum の王となつ

て」<sup>(4)</sup>ここにチベットにおける「ホシヨート王国」が成立した。

青海ホシヨート部が青海に本拠地を置き、青海やカムのチベット人などを貢納民としていたことは清朝史料にみえる。<sup>(5)</sup>また西蔵<sup>さいざう</sup>地方でも、ナクツァン、ナクシヨ、ホルカシなどの牧畜地帯にホシヨート王族の属領が設定されていた。<sup>(6)</sup>また、ミリやデルゲのようにホシヨート部の軍事活動に協力し、または抵抗せずに地位や領地を保持した地方領主も存在した。<sup>(8)</sup>よってホシヨート王国のチベット支配体制は、ホシヨート部の一部と属領を配分されたグシハンの諸子や、それぞれホシヨート部に対する従属の度合いに様々な差がある地方政権が、ギャルポを宗主として各地に割拠するというものであったといえよう。

ラサ政府「デプン寺の活仏ダライラマ五世を擁する同寺の執事 zhal ngo ソナムラプテンが首班たるデシに任命されてラサに設立された行政機構。シャカッパは「ガンデンポタン」と呼称 (TPH, p. 111) については、その発足にあたり、グシハンが「チベット十三万戸 bod khri skor bcu gsum」<sup>(9)</sup>を献上したとか「衛蔵両処」<sup>(10)</sup>を「達頼喇嘛・班禅喇嘛」に布施して「香火田地」とした<sup>(11)</sup>という記事が見られる点からみて、シャカッパのいうような「東は打箭鑪から西はラダック国境に至るまでの全チベット (TPH, p. 111)」の政府ではなく、ウイ、ツァンの一部地域に限定された範囲のみを管轄する地方組織にすぎなかったことは間違いない。しかしこれがホシヨート王国の支配を受けない独立政権だったのか、ギャルポ宗主下の地方領主だったのか、ギャルポ属領の管理機関にすぎなかったのかなどギャルポやホシヨート部との間にいかなる関係にあったのかについては、ラサン以前の状況についてはまだ解明されていない。しかしホシヨート王国末期、ラサン以後は明確となる。一七〇三年にギャルポとなったラサンは、一七〇五年にデシ・サンギェギヤムツォを打倒し、ホシヨート人の配下をカロン（閣僚）として送り込み、ラサ政府をギャルポの手に直接掌握したのである。本稿ではラサンによって樹立された、ホシヨート部が直接にラサ政府を支配する体制を、ラサンの死後も含めて「ラサン体制」と呼ぶことにする。

ペテック氏は(○)において、ラサン政権の構造についても詳しく触れているが、ラサンの権力基盤であるホショート集団にかんする氏の見解にも首をかしげざるをえない点が多々ある。本稿ではラサンの西藏支配の基盤であるホショート集団の組織構造の解明を中心として、ラサン体制の構造とその解体過程について考察したい。なお、ホショート王族の系譜は石濱一九八八―三の方式に準じてアルファベットと数字の組み合わせにより示すものとする。<sup>19)</sup>

## 一、ラサン体制の構造

ラサンがラサ政府に配した部下については、ペテック氏に詳しい(No. 278-180)。ペテック氏は、ラサンがラサ政府に対してグシハンも行使しえなかった絶対権力を握ったとする一方(CT, p. 240)、ラサン AIBIC2 が掌握するホショート集団の規模についてはきわめて小規模なものと考えている(CT, p. 240, No. 278-279)。彼はグシハンの諸子による遺産の相続について、青海地方における牧地と部衆は傍系の九子の間で、とくに末子に手厚く分配され、ギャルポ位を継承したダヤン AIBI は「チベット」「本稿でいう西藏」における父「グシハン」の権利と残留した「ホショート」部民に対する指導権」だけを継承したと考え(CT, p. 240)。そのため即位前のラサンやスルジャが青海で活動していたことを指摘しながら(No. 268, 284)青海にはギャルポの地盤が存在しないと考えている。また西藏に「残留した部民」についても、ラサ西北のナムツォ湖畔のダムに配置された集団だけを取り上げている。この見解に対し、以下、青海、西藏それぞれにおけるギャルポ直属のホショート集団の組織と、青海におけるギャルポ支持派の勢力についてみる。

### 1 青海におけるギャルポの勢力

まず、青海におけるギャルポ直属の集団について。佐藤長氏は、清朝の青海ホショート部征服の結果成立した青海ラサン体制(一七〇五―一七二七)の構造とその解体過程について

二十九旗のうち、北前旗・南右翼後旗・南左翼後旗がダヤンの子孫を祖として青海の東岸から北岸にかけて分布していることを示し、実際にはギャルポであるダヤンもまた青海湖近辺に牧地を配分されていたことを明らかにしている（佐藤一九七三—2<sup>1</sup>、pp. 443, 446—447）。また加藤直人氏は「下北塔」のモンゴル人ムスリムの村の一部がラサンの第二子スルジャ・AIBIC2D2の属領であることを指摘し、ラサン期においても青海にギャルポの地盤があったことを示している（加藤一九八六 pp. 38, 40）。以下青海におけるギャルポの勢力をみてゆこう。

康熙末年の状況を描いた輿地秘図にはボロチュンクク河上流（第四排第四号）にスルジャの天幕が描かれている。またダライラマの選定を巡って青海のホシヨート王族が二つに割れた際、スルジャの名が一方を代表する「五家」の一つとして挙がっており、<sup>14</sup> 彼が単なる一時的な滞在者ではなく、青海におけるひとつの勢力であったことがわかる。五家の他のメンバーを見ると、アラブタンオンポ AIB3C2 は兵力<sup>15</sup> 一〇〇〇弱、プンスクワンジャル A6B3-C2D1 は二二〇〇戸<sup>16</sup>、兵力二〇〇〇弱、同じくダヤン A6B4C1 は一三五〇戸、セプテンジャルは六〇〇〇戸で兵力二〇〇〇弱であり、スルジャもこれらに匹敵する勢力を有していたと思われる。ラサンがスルジャに六〇〇〇の従者を付けて青海に派遣したのは一七一四年であり、<sup>17</sup> 長子ガルダンダンジン AIBIC2D1 もイリに発つ以前は西蔵にいた（CJ, p. 38）。即位以前のラサンが青海も拠点としていたこと、<sup>18</sup> またラサンがラサ政府を掌握する以前、ラサンとデシ・サンギエギヤムツォの対立に際しラサンが青海へ往くよう求められていることなどから、<sup>19</sup> ラサンが青海にも地盤を有していたことは間違いない。<sup>20</sup> 青海ジュンガルの烏巴什車臣齊桑なる者は一六九六年に父とともにラサンの先代グンチュクに庇護を求めて以来、一七一七年にスルジャの従者として西蔵へ赴くまでずっとボロチュンククに居住していたと述べている（稿八27左・摺五35右）。すなわちスルジャの勢力は彼の青海派遣とともに新たに築かれたものではなく、ギャルポ一家伝来のものである。

次に、ギャルポと他のホシヨート王族との関係について。ラサンはデシ・サンギエギヤムツォを打倒すると、デシ

がダライラマ六世として即位させていたツァンヤンギヤムツォを廃位して、かわりにイエシエギヤムツォを立てた。ホシヨート王族たちの中でこの措置を支持する者がラサン派、反対してツァンヤンギヤムツォの生まれかわりとされるカルサンギヤムツォをイエシエギヤムツォの対抗馬として擁立した者が反ラサン派といえる。

ペテック氏はラサンのこの措置を巡ってホシヨート部が二つではなく三つに割れたと考えている。すなわちホシヨート王族はスルジャも含めみなラサンの措置に反対で、その中でさらにラサンと戦ってカルサンギヤムツォをラサで即位させようとする一派と、清朝の引き渡し要求に応じるよう求める一派に割れたとするのである (Note, p. 284)。しかし清朝がカルサンギヤムツォを真のダライラマとして認めるのはラサンの死後であり、それまでは一貫してイエシエギヤムツォを擁するラサンを支持し、カルサンギヤムツォの真偽を検討するよう求める反ラサン派に冷淡な態度を取り続けた (石濱一九八八—2, p. 210)<sup>(1)</sup>。清朝がカルサンを手中に収めるということは、イエシエギヤムツォの地位を脅かすライバルをその支持母体から切り離して隔離することであり、非常に有効なラサン支援である (A.T, p. 152, 136)。よってホシヨート王族でカルサンを清朝に委ねよう求める一派は明らかにラサン派といえる。

この一派に属するのは上述の「五家」の面々で、スルジャ、アラブタンオンボはともに左翼のダヤン AIBI の系統に属し、プンスクワンジャル、ダヤン A6B4C1 はともに右翼のグシ汗の第六子ドルジの系統に属し、セプテンジャルは青海ジュンガルに属する。

これに対し、ツァンヤンギヤムツォの生まれ変わりを探したり、カルサンギヤムツォをダライラマとして擁立しようとしたり、これをダライラマとして礼拝したりするなど、イエシエギヤムツォを否定する行為を行った人物を、ダライラマ七世の伝記から拾ってみると、①メルゲンダイチン A2B2C2<sup>(2)</sup> ②チンホンタイジ A2B2C1D1<sup>(3)</sup> ③ラフテンノモン A2B4<sup>(4)</sup> ④エルデニホルケ A4B1C1<sup>(5)</sup> ⑤ホルケダイチン A5B2C1D1<sup>(6)</sup> ⑥ンフワンラフテン A5B2C2D1E1<sup>(7)</sup> ⑦ジュンワン・エルデニジン A5B2C3<sup>(8)</sup> ⑧ランキモン A5B2C4D1<sup>(9)</sup> ⑨ダヤン・ホンタイジ A6B4C1<sup>(10)</sup> ⑩ガロン

チエンペル A7B1C1<sup>1</sup> ⑪タシトンゾブ A7B6 (A7B6C1)<sup>2</sup> ⑫ロサンテンキョニラブテン A7B4C1<sup>3</sup> ⑬エルデニボ  
 ショクト A7B2C1 (D1)<sup>4</sup> ⑭チンワン・バートルタイジ (A10)<sup>5</sup> ⑮ロブサンダンジン (A10B2)<sup>6</sup> ⑯エルケタイジ<sup>28</sup>  
 ⑰ゲレクジン<sup>29</sup> ⑱タシブシツォ<sup>27</sup> ⑲ダライホンタイジなどの名が見られる。このうち⑨ダヤン・ホンタイジは先  
 述の「五家」の一人であり、彼の場合カルサンを礼拝したのは、真のダライラマと認めてのことではなかったことが  
 わかる。

ダライラマの選定を巡る問題で名の挙がったホショート王族の系統を見てみると、ラサン派は左翼のダヤン系、右  
 翼のドルジ系、反ラサン派は左翼のオンボ系、ダランタイ系、右翼のイルドゥチ系、フルムシ系、タシバートル系  
 と、諸子の系統別に明確に区分されている。一つの系統が分裂して両陣営に参加した例は見えず、おそらく各系統は  
 それぞれ団結して行動していたのであろう。アヨシ系やサンガルジャ系、グシハンの諸弟の系統、セブテンジャルを  
 除く非ホショート王公に属する人物はいずれの側にも名が見えない。

以上より、青海におけるギャルポの勢力は、スルジャが預かるギャルポの直属集団に加えて、ダヤン系、ドルジ系の  
 傍系王族や青海ジュンガルなどから構成されており、反ラサン派の五系統の王族たちと対立していたものと思われる。

## 2 西藏におけるホショート集団

ラサンの治世中、西藏におけるホショート集団は、ダムとガルトク〔現ガル sgat、ガリ地方中部〕に配置されていた。  
 ダムは現行の行政区分ではダムシユン宗 (dam gzhung rdzong 当雄県) にあたり、一九五八年当時のダムシユン  
 を調査した「当雄宗調査報告」によれば、この宗は、グシハンがチベット平定時に伴ってきた五〇〇余人をダムの地  
 を選んで駐屯させたことに由来するという (p. 29)<sup>30</sup>。清朝史料にも「達穆蒙古」の起源として同様の内容を記すもの  
 があり、ただしその規模は「五百三十八戸」とする。これより約七十年後、ラサンがサンギエギヤムツォを打倒した

際の兵力も「五〇〇ばかり (PSJZ, 10841)」であり、五百を単位とした行政組織の存在が伺える。一七二七年以後の制度から類推すると、ダムホシヨート集団を構成する五つの部落にそれぞれ百戸が置かれ、一戸につき兵一を徴収していたものと思われる。

ガルトクの部隊について、デシデリは一七一五年の状況として「タルタル人の強力な一隊と…チベット人の軍隊」からなり、駐屯部隊は定期的に交代することを述べている。<sup>(31)</sup> この部隊はグンチュク AIBI の治世中の一六八四年ころ、対ラダック戦争の後に設置されたもので、初代司令官の名から「ガンデンツェワンの上(西)部軍 dga' Idan tshé dbang gi stod dmag」<sup>(32)</sup>とよばれてゐる (B6DL, 351b4)。ガンデンツェワン A6B2 は右翼の長ドルジ A6 を父としているが、司令官として青海から西藏に赴いたのではなく、僧侶として西藏の寺院にいたのが就任したものである<sup>(33)</sup>。配下のホシヨート部隊二五〇名もドルジの兵でなく「ナムツォ湖畔」すなわちダムから徴収している (MBTJ, 15a4)。MBTJ にはこのうち「数百人」が「ガリ三城地方の敵対者の肩を押さえ込む木枷」として残留したとあり (22b3-4)、最大でも二五〇名を越えなかったことになる。ラサン在世時の規模は、カンチェンネーが一七二〇年にこの部隊を率いてジュンガルに攻勢をかけた際の兵力が、彼が救出した捕虜で従軍した者も含めて「二百人」とあるの<sup>(34)</sup>で (稿十三14右、摺ハ46右)、二百人に満たなかったことになる。

### 3 ラサン体制の構造

前節で示した如く、ラサンの直属集団を含むダヤン系ホシヨート集団の配置は、青海に圧倒的な比重が置かれている。すなわちダヤン時代は、ギャルポ自身の所在はともかく、ギャルポに直属するホシヨート集団の本体が青海にあったことは明らかである。またラサン体制においても、ラサンを支持するダヤン系、ドルジ系の傍系王族を考慮すれば、ギャルポが直接掌握するホシヨート集団の規模が青海と西藏でさほど差がないとしても、その権力基盤の重心は

なお青海にあったことになる。

ラサン体制は、このようなホシヨート集団の軍事力を背景として、ギャルポとその側近たちがラサ政府を掌握する  
 というものであったといえよう。

## 一、一七二七年以後のラサン体制

ジュンガルの西藏侵攻は、西藏・青海の両集団にそれぞれの打撃を与えた。

青海の集団を率いていたスルジャは一七二七年、妻チャンマルと数人の従者を連れて西藏に赴き、そのまま西藏で父ラサンとともにジュンガルを迎撃した。ラサンは戦死し、スルジャをはじめとするラサン一家は捕虜となってジュンガル本国へ連れ去られた (Note, pp. 277-278)。チャンマルはジュンガルの手から逃れて清国の哨所に辿り着き、本拠地にもどってツェレンジャブの補佐を受けながら青海の集団を統率した。ただし青海の集団自体は動員されなかったためほとんど打撃を受けていない。一方、西藏ではダムの部隊が迎撃の主力となり、ラサン敗死の後、ホシヨート人たちは殺害、投獄、流刑などの措置を受けた。<sup>37)</sup>

ペテック氏はジュンガルに対するこのラサンの敗北によって、ホシヨート部の「チベット」支配が終焉したとみなしている。<sup>38)</sup>これに対し、以下にラサン亡き後もラサン体制が継続したことを示したいと思う。対照する対象として、ラサ政府におけるホシヨート人カロン(閣僚)、権力基盤としてのホシヨート部、ギャルポを取り上げる。

### 1 ラサ政府におけるホシヨート人カロン

ジュンガルの撃退後のラサ政府の状況について、ペテック氏は清朝所属のハルハ・モンゴル人二名、ホシヨート王族二名、チベット貴族二名からなる臨時政府をへて、一七二二年に純粹なチベット人政府が成立したとする (Note,



p.287)。しかしこの政府の三カロンの一人カンチェンネーについては、はたして「純粋なチベット人」であるかどうかきわめて疑わしい。ペテック氏は、CT 初版において彼とデシデリの記録(AT)に登場するラサンの「タルタル人」重臣とを比定していたのを撤回し、彼をシャン出身(AG, p.51)のチベット人とした。しかしその根拠は示さず、ダシデリの「タルタル人」重臣の事蹟とカンチェンネーの行動とが一致しないことを力説するのみ(Note, p.280)である。

### (1) MBTJ ドリン伝の記述

彼について、清朝史料の多くは *khang chen nas* を音写した「康濟鼐」「kancinaï」などと表記するが、名はソナムギャルポ *bsod nams rgyal po* と<sup>(40)</sup>。MBTJではこの名は一度も用いられず、また「カンチェンネー」と、ほぼ同義の「カンチェンバ」合わせて十六回しか用いられぬ一方、「ダイチン」が一三六回(うち一七二一年に授かった「バートル」号を並記した「ダイチンバートル」七八回を含む)使用されている。

テンジンペンジョル(カンチェンネーの兄ツェプテンタシーの孫)が著した一族の伝記(以下ドリン伝)には、ギャンツェ近郊のガシに「先祖伝来」の所領を持つとあり、一章をたててその地方の麗しさを描写している。よってこの一族がツァン地方に縁があることは間違いない。ただし祖先に関しては「ダライラマ五世がチベットの政・教二権を掌握した際のガンデンポタンの中級役人の名簿にガシバという武官が明記されていた」という著者の父の言葉を紹介する(p.23)一方、系譜や名や事蹟などはカンチェンネー兄弟より前の世代について全く沈黙している。<sup>(補注※)</sup>一方MBTJにはカンチェンネーがチベット人ではないことを示唆する記事やホショートル人だと明言する記述が見られる。一七二三年に二名のカロンの補任された際の記事に、候補となったツァン人のボラネーに対し東チベットの先任カロ

ガンデンポタンの職員の慣例ではツァン地方の人々が「カロンという」筆頭の大官の地位に就いた例はないし、とりわけポラハタイジはラサンハンの側近だったことは間違いないから時期早尚である(2053-4)。

と反対したとある。これはツァン人でカロンとなるのはポラネーが初めてであること、言い換えると先任カロンのカンチェンネーは累代ツァンに地縁があるにもかかわらずツァン人ではないことを意味する。またウィ・ツァンの内戦(一七二七—一七二八)において西チベットの掌握をめざすポラネーの行動を描写した記事の中で、ウィの大臣と結ぼうとしたツァンの將軍ヌマワの書簡の一節に、

ダム地方の、ソク族ダイチンに忠誠心を持つ者たちとポラワが手を結ぶその前にツァン地方などを征服すべきであつて、(261a-5)。

とあり、ここではカンチェンネーが「ソク族 sog rigs」すなわちホシヨートだと明言されている。

## (2) タルグムツェージ Targum-tresciji との比定

ACにはラサンの重臣として「総理大臣 Prime Minister」または「副王 Viceroy」の地位にあるタルグムツェージなる「タルタル人」重臣が登場する。この人物はジュンガルに対する迎撃戦でラサンと共に戦い、陥落間近のポタラ宮陥からラサンの第二王子スルジャと共に脱出し、タクツェバに捕らえられてジュンガル軍に引き渡され、捕虜としてイリへ送られる途中脱走し、ガルトクを拠点として西チベットで勢力を蓄え、西チベットを経由するイリと駐蔵ジュンガル軍との使者の往来を遮断し、チベット政府の財宝をイリへ持ち去ろうとするジュンガルの一部隊をガルトク城内で騙しうちにしたとされる(AT, pp. 158-165)。ガルトクを拠点としてジュンガルに抵抗したラサン遣臣の筆頭はカンチェンネーであり、ペテック氏はCT初版では彼とカンチェンネーを比定していた。しかし一九六六年以後、Note CT改定版、AGなどでそれを撤回している。根拠としてはタルグムツェージと民族が異なること、彼に相当

する総理大臣が滿蒙漢藏各語の史料中には見うけられないこと、ジュンガルの侵攻時カンチェンネーはガリにいてジュンガルとの戦いには参加せず、ジュンガルの捕虜になったことはないなどを挙げ、デシデリの記録のうちタルグムツェージに関する部分は事実を基礎として物語をでっちあげたとか、現実の歴史に属するものではないとまで極論している (Note, p. 280)。

民族系統は既に述べたので、ペテック氏の残る見解の根拠をみてゆこう。

ラサン政権におけるカンチェンネーの地位について、ペテック氏はカンチェンネーがガリからジュンガル軍の接近を警告する書簡を送ったという MBTJ の記事 (117a2-6) を是とし、デシデリをラサまで引率したタルタルの王女に代わってガルトクに赴任した部隊の指揮官をカンチェンネーではないかと推測している (AG, p. 51, 註(3))。この書簡の記事は DG にもあり、彼の肩書をガリの知事 rdzong dpon としている (65a4-6)。ドリン伝も、ダライラマ六世の時はラサ政府の宗(<sup>ジ</sup>県)や莊園の業務を担当し、ラサンの時はガリ地方の長「ガルブン sgar dpon」だったとする (p. 25)。これに対し『西藏記』は「昔為拉藏罕仲意 (drung yig 秘書)」と述べ (上12右) MBTJ は「ダイチンなる者は、ギャルボ・ラサンカンの恩寵が非常にあつく権力の強固な者であった (104b5)」と述べ、一七一四年のブータン出兵の際には三路に別れて進軍するチベット軍の中央部隊を率い (103b3)、右翼、左翼部隊の指揮官も彼の指揮を受け入れていた (104b5) ことを述べている。すなわち彼が「総理大臣」か否かはともかくラサン政権の中核で活動した重臣で、単なる地方官でなかったことは明らかである。ドリン伝の記事は著者が一族の伝承に詳しくないか、あるいは意図的に情報を伏せたのかいずれかであることを示すものである。

MBTJ では、カンチェンネーが上述の書簡をガリから送った後、次に彼が登場するのは、二年後ジュンガル本国へ移動するジュンガル部隊とホショート捕虜がガリを通過する場面である (166a4-b2)。ラサンのジュンガル迎撃戦には登場せず、そのためペテック氏の見解の重要な根拠となっている。

カンチェンネーがラサンに送ったとされる書簡は、

ヤルカンドからここそこに伝わった噂が私どもの耳に入りまして、「非人の心をもち争いと戦いを好むジュンガル人の兵五〇〇〇の部隊が故郷を出立してガリ地方に向かつていった」とのことです。「それが」敵か味方か判断しがたいため、ガリ三域の兵を動員し、サゲンの境界に配置してよいかどうか、命令をお下しあれ (MBTJ, 117a3-6)

とある。この文面だけみると何ら破綻はないが、しかし清朝史料にみえる、回子阿都呼里なる清朝の捕虜の供述をみると、

策妄阿喇布坦令伊塞桑都噶爾・參都克・策零敦多卜・托卜齊等帶領六千兵、于去年十一月、由阿里克路往西進發、或前去征拉藏、或幫助拉藏之處、我知得不甚明白。<sup>(4)</sup>

とあり、構成、内容が酷似している。とりわけ、このジュンガル軍がラサンの「敵か味方が判断しがたい」というカンチェンネーの個人的な判断にあたる部分まで類似しているのがきわめて奇妙である。カンチェンネーがガリにいたように見せ掛けるため、捏造されたものである（たとえば動機はジュンガル迎撃戦におけるカンチェンネーの戦績をポラネーのものにするため）可能性がある。

次に(1)ではタルグムツエーの行動とされている、ラサンの第二子スルジャが捕虜となった際の従者、ジュンガル本国へ送られる途上脱走をもくろむホシヨート人捕虜、護送されるホシヨート捕虜の解放者などの三項目について、他の史料ではいかに記述されているかをみよう。

# イ、スルジャが捕虜となった際の従者について

これについて、スルジャの属人ボダは、

わが主スルジャ・タイジはダワザイサン・バシハ夫婦と二人の従者とともに逃れた。替え馬と食料を得るためデ

パ・タイジのもとに行つた。一行がそこに着くと、デバ・タイジは皆を捕らえてツェリントンドゥブの元に送つた。<sup>(44)</sup>  
と述べている。允禩奏摺にもイリに送られる捕虜の一員としてダワザイサンの名を挙げる証言がある。捕虜ダワザイサンの行動については次に他の捕虜とあわせて取り上げる。

#### ロ、脱走をもくろむホシヨート人捕虜について

ジュンガル本国へ送られるホシヨート捕虜護送隊は、出発の日時、警護者の名、捕虜の規模や有力人物の名などの相違により、少なくとも次の六隊があつた。(以下、各隊に番号①～⑥を付して区別する。)

康熙五十七年出発の諸隊

①二月二十九日出立。警備の長はサンジ。警備兵七〇。捕虜の詳細不明。<sup>(46)</sup>

②四月五日出立。警備の長は巴図蒙克。警備兵一〇〇または三〇〇。捕虜はラサンの属人であるホシヨート二〇〇戸または四〇〇戸、有力人物は岱青巴図爾、達瓦齊桑、車凌扎布、巴図蒙克など。七月に青海へ向けて脱走し、十月初旬、ジュンガル軍に補足され、大部分が再度捕獲され、ウイへ送られる。<sup>(47)</sup>

③五月九日出立。警備長は班第・阿勒達爾和碩濟。警備兵三〇〇。捕虜は、ラサン所屬の五〇〇戸一〇〇〇人余、有力人物は噶克察巴図爾など。三十戸ほどが九月三日脱走し、十月一日、②の脱走者と合流。<sup>(48)</sup>

康熙五十八年出発の諸隊

④⑤二月二十四日出立。警備はサンジ、ゴマン学堂のラマ達克巴藏布など。捕虜は、西藏に残っていたラサン属下の

「蒙古・額魯特・唐古忒」など一〇〇〇人、有力人物は岱青巴図爾、巴図爾諾彦など。<sup>(49)</sup>

④警備の長サンジ。警備兵一〇〇または六〇。倭拉吉 wargi (西藏) の男女幼孩錢財。捕虜の有力人物には岱青巴図爾がいたと思われる。六月、ナクツァンで宿営中、カンチェンネーによって壊滅。<sup>(50)</sup>

⑤警備のジュンガル兵六〇または六五人。チベット人の的巴・鄂特藏巴、昌邁巴、的巴・阿碩特巴ひきいるチベット

人五十人も警備を担う。捕虜はラサンに所属する巴図爾諾彦の党女子五〇〇または六〇〇人。ガルトクでカンチェンネーの出迎えを受け、警備兵は宴会で酔ったところを殺害され、「達爾扎那拉巴洛布藏」の二名だけ逃れる。<sup>(5)</sup>

⑥三月出立。警備は莫魯瑪齊桑、聶斯喀拉巴圖爾、達爾扎。警備兵六〇または六五。「品行卑汚」のため還俗させたジュンガルラマ四〇人。捕虜はラサンの属人一三三〇人、または厄魯特男女孩童と二〇〇〇のチベット人、有力人物は胡爾敦。七月、ガリでカンチェンネーが警備兵を宴会で油断させて殺害。またはカンチェンネーが警備兵を宴会でもてなす一方、武器を捕虜に渡し、出立後、捕虜が叛乱をおこして壊滅。<sup>(6)</sup>

ホシヨート人捕虜の有力人物としてはダワザイサン（達瓦齊桑）、ダイチンバートル（岱青巴圖爾）、バートルノヨン（巴圖爾諾彦）、ドラルタイジ<sup>(7)</sup>などの名が挙がっている。このうちバートルノヨンはガルトクまで来て、はじめて解放されるので、タルグムツエージ<sup>(8)</sup>ではありえない。石濱裕美子氏はドラルタイジがタルグムツエージにあたるのではないかと推測を提示している。<sup>(9)</sup>以下、捕虜のダワザイサン、ダイチンバートルの行動をみてみよう。捕虜ダイチンバートルは四月五日に出発した一団<sup>(2)</sup>の中に見え、脱走して捕まったので、二月二十五日に出発する一団<sup>(4)</sup>の中にもその名がみえる。これが捕虜ダイチンバートルの名が見える最後の記事である。この一団は、のちサンジを警備長とする一団<sup>(4)</sup>がナクツァンで壊滅する一方、捕虜バートルノヨンを護送する一団<sup>(5)</sup>はガルトクまで到達しているので、途中で分裂したことがわかる。捕虜ダイチンバートルは⑤の隊が解放される記事の中に名が挙がっていないので、④の隊にいたと推測される。

一方捕虜ダワザイサンについて、ラサンの下人バヤルは「途上での噂では、ダワザイサンは病が再発し、身体が腫れてナクツァンで病死したと聞いた」と述べており、彼もまたナクツァンまで到達していたことがわかる。このバヤルの証言で興味深いのは、②の隊の捕虜の有力人物について、ツァイダム都統アラウンの尋問に対しては「ダイチンバートル」だけを挙げる一方（稿二28右―左）、允禩の尋問に対しては「ダワザイサン夫婦」の名もあげる（稿

二八左—二九左）点である。允禩に対してはバトモンケが「ダワザイサン夫婦」を引率し、警備兵は「貝格」なる別人が指揮していたと述べる。この供述から「ダワザイサン」が、警備隊の長が自身で監視するほどの最重要人物であったことがわかる。このような重要人物であるダワザイサンが「ダイチンバートル」と別人なら、バヤル以外の証言にも登場してしかるべきであるが、実際にはバヤルの証言だけに現れる。しかもバヤルの供述の中でもひとつの場面で「ダワザイサン」と「ダイチンバートル」の名が同時に挙げられることはない。すなわちダワザイサンと「ダイチンバートル」は同一人物である可能性がある。

#### ハ、カンチェンネーによるホシヨート捕虜解放について

カンチェンネーが⑤⑥の警備兵を襲撃する際に用いた、宴会で酔わせてだましうちにするという手法は、タルグムツェージのとった方法と一致している。<sup>66</sup>④のナクツァンにおける移送隊襲撃については四名の証言があり、うち平逆將軍延信とデバ・ガポエバの二名はカンチェンネーがガリ駐屯部隊と合流する模様についても述べる。延信は、カンチェンネーのナクツァンにおける捕虜解放については、

往那克産地方、収拉蔵属唐古忒西拉郭爾人等、与阿里人等親集兵力、（稿十四30右）

と述べる。ガポエバはこの趣旨をよりくわしく、

「この一行が」ナクツァンで宿営した際、ダライラマに所属するデバ・カンチェンネーは部下を送り出し、偽って「部下を先発させて「輸送用の」家畜を準備させます」と称し、伏兵を準備した。ジュンガル、オイラットらが宴会で皆酔うと、伏兵が現れて六十余人を皆殺しにし、ただ五人だけが隠れ逃れた。カンチェンネーは部下およびジュンガルに送られるラサン王の属人「と」ナクツァンにいる。ラサン王の属人を配下におさめ、ガリ・ナクツァン境界地方でガリ盟の兵と合流した。あわせて万余の兵を数え、嚴重に陣地を築いている（稿七32左—33右、摺四33右—33左）

とのべる。カンチェンネーがどこからナクツァンに出現したのか述べられていないが、ここでまずラサンの属人を収容したのち、ガリの兵力と合流したと述べている。外部から襲撃をかけたのであれば、もともとガリ兵を率いていたはずであり、すなわちカンチェンネーは外部からこの隊を襲ったのではなく、捕虜として隊の内部にいたとする方が妥当と思われる。

以上、允禔奏摺の記事を総合すると、捕虜ダイチンバートル、ダワザイサンの消息はナクツァンで途絶え、同じ場所、カンチェンネーが出現している。ダイチンバートル、ダワザイサン、カンチェンネーは同一人物である可能性があり、その場合カンチェンネーの行動はタルグムツエージとほぼ一致するのである。

### (3) 清朝史料の記述

清朝史料には、カンチェンネーをホシヨートではなくチベット人だとするものが見受けられる。表伝はカンチェンネーの兄ツェプテンタシを「唐古特人」とし(九三一右)、西藏記はカンチェンネーをより詳しく「後藏人」とする(上12右)。

カンチェンネーが允禔や延信に送った使者の供述や咨文は清朝にとって彼に関する基礎史料となつたとおもわれるが、允禔奏摺に収録されているものには、自身の民族系統やラサン政権時代の境遇について語ったものはない。清朝史料には、西藏記が「昔はラサンの秘書だった」と述べる以外(上12右)には、ジュンガルの占領軍への抵抗活動の指導者として登場する以前のカンチェンネーの経歴・事蹟について述べたものがない。清朝はジュンガルのチベット侵攻以前のカンチェンネーに関する情報を把握していなかったと思われる。一方で、カンチェンネーと直接の接触を持った延信は彼を「唐古特」と述べている(稿十四30右)。すなわち清朝史料の記述はカンチェンネーの自称に基づく可能性が高い。



ここで注目したいのはMBTJにおける彼の呼称である。「ダイチン」は全編にわたって、「ダイチンバートル」はバートル号を受けた一七二一年以後の記事で使用されるが、「カンチェンパ」「カンチェンネー」は全部で十六回使用されたうち十二回が一七一六年から一七二二年までの記事に集中している。そしてこの期間の記事には「ダイチン」「ダイチンバートル」の呼称は全く用いられていない。MBTJの叙述の視点は現在から過去を振り返るのではなく、筆者の視点も文中の時間の推移に沿っており、登場人物の成長や昇進にともなって文中の呼称を変化させている。カンチェンネーの呼称についても実際の呼称の変化を反映していると思われる。

MBTJにおいて彼が「カンチェンネー」「カンチェンパ」とだけ呼ばれている時期はほぼジュンガルの侵攻から撃退までの期間に相当する。脱出を果たしたカンチェンネーはジュンガルの捕虜護送隊をガリに騙して誘き寄せるため、正体を隠してチベット人のカンチェンネーを名乗ったのではないだろうか。そして清朝軍にはこの名によって彼の活躍がつたわり、そのまま記録の上に固定されたものと考えたい。

## 2 西蔵のホショート集団の再編成

ジュンガル軍は奇襲により西蔵の中枢部を直撃したため、ラサンが滅亡した後も周辺地域には無傷の部隊が残っていた。カンチェンネーがジュンガルに対する武力抵抗を起こした際の基礎となったのは、そのうちのガルトクの部隊である。この部隊も独自に捕虜奪還の計略を巡らせていた。彼らは康熙五十八年二月、ナクツァンでチベットからジュンガルへ赴く使者を待ち受け、「聞くところによると、あなたがたジュンガルは我が国と戦争したそうですね。我々は野営していますがあなたがたを妨害するつもりは有りません。三隊に分かれてどしどしお通りなさい」と述べた（稿七11左―12右、摺三44左―45右）。康熙五十七年に出立した三隊のうちの二隊は、おそらく侵攻路を逆に辿ってつつがなく本国に到達したものと思われる。しかし康熙五十八年に出發した三隊は、この甘言につられてか、前節で

示したとおり、敵対勢力が待ち構えているナクツァンやガルトクまでのこのこと赴き壊滅させられている。この三隊の捕虜にはホシヨートだけでなくチベット人も含まれていた。証言者間で食い違いがあるため正確は期しがたいが、一〇〇〇—二〇〇〇人程度のホシヨート人捕虜を回収したものと思われる。

カンチェンネーは一七二一年にラサの居館や属人養育のための資産の給付（稿十七七右）を受け、ガリとラサを往来しながら政務を行つた。家族はラサへ移したが、<sup>(58)</sup>彼は長期にわたりガリにおり、解放した捕虜をいつどのように再配置したかは不明である。

一方、延信の報告には、ラサンの属人で、清朝軍がラサ占領後に牢から解放放った者、「ジュンガルから続々と逃亡してきた者」、「老人、病人、業の無い障害者」が七百戸を数えた（稿十四八左—九右、摺十一二七右）とある。延信は彼らに青海のチャンマルのもとへ赴くかどうか質問しているので、この七百戸がホシヨートであることがわかる。彼らに対する処置として、ラサンの兄テンジンワンジャルの妻端済特の「在蔵」資産二箇所の「産業牲口田地等」をツェレンジャブに委ね、その「地租・糧」を毎年彼らに均分させるようにしたとある（稿十四九左—一〇右、摺十一二八左—二九右）ので、カンチェンネーが解放した捕虜とは別の集団であることがわかる。すなわちジュンガル撃退後の西藏におけるホシヨート集団は、ガルトクの駐屯部隊と解放捕虜からなるカンチェンネー統率下の集団と、青海のツェレンジャブが管轄する七〇〇戸があつたことになる。

『西藏記』「事蹟」の項は、一七二三年以降（カロンを五人挙げていたため）のラサ政府の組織を取り上げている。カンチェンネーの勢力基盤については、

カンチェンネーは…ツァン以西の「北一帯」地方およびラサン・ハン属下のタイジ・ガワンユンテン（阿旺雲登）、都納爾など二十余人を管理し、「蒙古」二千余りを蔵（「ウイ」）に住まわせる。皆に蔵内の兵糧を供給してダライラマを護衛させ、兵を動かす必要が起ると、彼らを率いて往来する（上十二右—一三左）。

とのべる。「北一帯」については、カンチェンネーは配下のホシヨートをダムやヤンパーチェンなど(MBTJ, 265頁)に配置していることから、チャンタン南縁の牧畜民たちの居住地域を指すものと思われる。また「拉蔵罕屬下台吉……二十人」については「頭目」の節で「台吉」を「宰桑」「那彦」とともに「蒙古之頭人」の称号として挙げており(上23左)、よってこの史料において台吉とされている者はホシヨートであることがわかる。

カンチェンネーは捕虜護送隊を壊滅させたあと、ジュンガルに公然と敵対の意志を表明して挑発し(稿八31右)、康熙五十九年五月、ラサン旧属のホシヨート兵二〇〇、チベット兵三〇〇〇を率いて(稿十三14右、摺十46右)カンバラ以西の地方を制圧し、ジュンガルの退路を遮断した(MBTJ, 170b3-4)。延信はこの時「カンチェンネーに随つて尽力した者」としてポラネー(頗羅鼎)、ガワンユンテン(阿旺元端<sup>89</sup>)、ユルドウムカー(胡爾敦<sup>90</sup>)の三人の名を挙げている(稿十五6右)。MBTJはこの時のポラネーがカンチェンネーの配下ではなく対等の同盟者で、ポラネーがこれらの軍隊の総指揮を担当したかのように描いているが、実際にはカンチェンネーの陣営に馳せ参じた一将にすぎなかったと思われる。ただしMBTJが描くほどではないにせよ西チベットの有力人物の中では群をぬく存在だったらしく、一七二三年に二名カロンが補任された時にはその一人に選ばれている。

「蒙古二千余」について。有事の際に「帯此等行走」とあるので、この数は属下のホシヨートの総数ではなく、有事に兵力として動員する数である。百戸集団を元にした定額ではなく、有事に兵たりうる一定年齢の男子の総数である。清朝の青海征服後、ツェレンジャブの管轄していた「七百戸」もカンチェンネー配下に移り、この「二千余」の母体となったものと思われる。ダライラマを護衛するとあり、またツェリンワンギャルは自伝の中でカンチェンネーに対するクーデタの際自身が「ダイチンバートルの蒙古軍隊」を接収するためナムツォに派遣されたと述べている(カロン伝, p.12)ので、ダムに配置されていたことがわかる。

## 3 ギャルポ位継承問題

チベットに軍事介入を行った康熙帝は、ジュンガル撃退後の体制について、カルサンギヤムツォをダライラマとして即位させること、ホシヨートのギャルポをその保護者として立てることを構想していた。ホシヨート王族にたいするギャルポ位継承の約束については加藤直人氏、石濱裕美子氏が「ロブサンダンジン」の叛乱<sup>(6)</sup>に関する論考において取り上げている。ジュンガル撃退後の政体に関する康熙帝の勅旨には、加藤一九八三に紹介されているものの他に、康熙五十七年に熱河で皇帝に拝謁したチャガンダンジンに対して、侍衛ラシを通じてくださったものに「撃敗準噶爾賊、推広固什汗立教。又固什汗之缺、応令誰坐」(稿十四22左)、MBTJに引用されているものに「チベットの政教の業務がいかにあるべきかについては一切智者五世の時にそうであった通りに実施せよ」(280b6-181a1, 別2 180a4 5aにも)というようなものがあり、ひろく旧状の回復を求めるものとギャルポ位を云々するものがあつたことがわかる。この勅旨に基づく候補者の選出は次のように行われた<sup>(6)</sup>。

康熙六十年九月十九日、延信とホシヨート王族たちはポタラ宮で誰をギャルポとしてチベットに駐在させるかを話し合つた。延信は王族たちに、皇帝に提出して裁可を仰ぐため存念を文書にして提出するようも勧めた。王族たちは即答が困難なので相談のうえ回答するとのべ、解散した。十月二十九日より回答がとどきはじめ、ロブサンダンジン、チャガンダンジン、エルデニエルケトクトネイ、パルジュルラプタン、チュイラクノムジ連名の稟文(稿十四21左—21左)では候補者を右翼のロブサンダンジン、チャガンダンジン、左翼のパルジュルラプテンの三人に絞り、「グシハンの子」(孫)は恭しく満洲大君主の決定を待ちます」と述べている。一方チャガンダンジンは単独の稟文(稿十四22右—23右)ではロブサンダンジンを推し、自らは青海の支配権を所望している。またチュイラクノムジも単独の稟文(稿十四23右—23左)では自薦しないとのべる。

三人の候補者のうちチャガンダンジンは十一月に病に陥り、他の候補者や駐蔵清朝軍の幹部と協議の上、青海で療

養するため十二月十九日西蔵を離れた。<sup>65</sup> ついで二月十三日、パルジュルラプテンは水土の適わない土地で久しく待ち続けたため属人に病になる者が多いと申し立て、十六日、勝手に西蔵を離れた。<sup>66</sup> こうしてロブサンダンジンはギャルポ位授与の沙汰を「恭しく」待ち続ける唯一の候補者となった。

二候補の退去はロブサンダンジンと示し合わせたもので、西蔵に進駐したホシヨート王族の間ではロブサンダンジンを推すことで一致していたらしい。延信も、ロブサンダンジンの部下たちが「われらの親王が空位となったラサンの王位に就く」と言い触らしていることを報告している（稿十四26右）。

一方、「タングート」たちの間では、ロブサンダンジンを含む青海の王族たちは、酔って騒ぐ、町の人の物品を盗む、婦人を拉致するなどの理由で評判が非常に悪かった。<sup>67</sup> 「タングートの官員」、三大寺やポタラ宮殿などの大ラマらは「先にラサンは庇護尊重してくれたが、かのオイラットはタングートみを見ることが家畜のようである」（稿十四30左）と述べている。またラサに進駐してきたホシヨート王族は先述の反ラサン派の面々が中心で、候補者にはダヤン系、ドルジ系からは一人も入っておらず、「蒙古人々ラサンの行いに従おうと思っている」（稿十三14右、摺八46右—46左）「カンチェンネーのようなラサンの遺臣にとっては、旧主ラサンに滅亡をもたらした者達を新たな主君にいただくことは耐えがたかったと思われる。ポタラ宮での宴会におけるホシヨート人たちへのぞんざいな給仕や、ガポエバ、カンチェンネーらによるロブサンダンジンを名指ししたギャルポ位継承反対などにもこのような背景があるものと思われる。

延信はギャルポ位継承問題に関する報告書の中で、ホシヨート王族のギャルポ位継承候補者の選定の経緯を述べるだけでなく、王族ひとりひとりについての見解を述べ、彼らのジュンガルとのふまじめな戦い振り、「タングート」たちの評判なども取り上げる。<sup>68</sup> そして「タングート」たちの間ではアラブタンオンポの評判がよいことを示し、延信自身はホシヨート王族の推薦とは別途に、清朝軍の一員として従軍しているアラシヤンのアボー A3B4C3 を継承候

補に推している。<sup>(74)</sup> この報告書もおそらく重要な要因となって、康熙帝はロブサンダンジンにギャルポ位を継承させないことを在世時にすでに決定したと思われる。ロブサンダンジンは一七二二年まで西藏で沙汰を待ち続けた後、<sup>(75)</sup> 空しく青海に帰還した。

では、康熙帝がこの時同時に「グシハン王家のチベット王権」自体も否定していたかといえば、それははなはだ疑問である。一七三一年、ジュンガルが「汗」に即位させるため兵五〇〇〇をつけてスルジャを西藏に送ろうとしているというポラネーの報告に対する雍正帝の回答をみると、

……準噶爾兵若以兵隨蘇爾雜、斷不可容留、即迎戰擊退。……帶領數人、恭順來歸、爾等收留、悉心安頓。至若

立汗之事、當令達賴喇嘛・班禪喇嘛奏聞於朕、方可建立。……今蘇爾雜若果率領數人來歸、爾即行奏聞、候朕另

頒諭旨。<sup>(76)</sup> 「文中の「爾」はポラネーを指す。」

とあり、清朝がスルジャの即位を認める場合の条件が述べられている。引用しなかった部分には、ジュンガル軍に備えた兵力の配置の指示や、ジュンガルの狡猾さを力説する記述がある。もし清朝と西藏側がともにこの時点でグシハン王家の王権を全く問題にしていなければ、雍正帝は兵力の配置の指示のみを行えばよく、ジュンガルの狡猾さを強調したり、スルジャ即位の条件を述べる必要はない。この回答は、当時ラサ政府を支配していたポラネーがグシハン王家を擁する態度をまだ持っていたこと、清朝が「グシハン王家のチベット王権」を否定していなかったことを意味するものである。また雍正帝がジュンガルの狡猾さを強調したのは、ポラネーが清朝の頭越しにジュンガルと手を携えてスルジャを即位させることのないよう釘を刺したものであろう。

康熙帝としては、ロブサンダンジンは不適當でも、西藏の人々に受け入れられ、清朝にコントロールが可能な形でならギャルポの復活に異存はなかったと思われる。

#### 4 ラサン体制の解体

以上、ジュンガル侵攻の以前と以後を比較してみると、青海、西藏の両ホショート集団は健在であり、青海側の指導者は西藏集団の一部を管轄している。ラサンの旧臣二名（ホショート人カンチェンネー、チベット人ボラネー）で西藏の西半分を管轄し、うち一人はカロンである。またギャルポは空位であるが、ホショート王族の継承権は否定されていない、などの点を見ると、ギャルポが不在の点を除き、ラサン体制は回復されたといってもさしつかえあるまい。

ラサン体制に終焉をもたらすきっかけとなったのは、清朝の青海征服である。ロブサンダンジンと、チャガンダンジン、エルデニエルケトクトネーら旧反ラサン派の内紛に対し旧ラサン派は拉致や死去で不在となったスルジャやダヤンを除きロブサンダンジン側に加担し、チャンマルもアラブタンオンポに囚われて行動を共にした（加藤一九八六、p. 387）。

清朝はこの紛争に対し、ロブサンダンジン側を叛乱者として大規模な鎮圧を加え、西藏の集団を除くホショートの各集団をことごとく滅ぼすか服属させ、その支配下にあった青海、カムを清朝の直接統治下に組み込んだ。<sup>(分)</sup> チャンマルは清朝の手に落ちたあと監視下におかれ（加藤一九八六、p. 388）、おそらくは叛乱者の一味として処刑されたものと思われる。スルジャ属下の巴爾出海<sup>(分)</sup>、春木珠児<sup>(分)</sup>らが清朝に帰順し佐領に編成された<sup>(分)</sup>という記事は、青海集団が解体されたことを示している。

この事件はカンチェンネーにとって大きな打撃となった。この結果、西藏に対する青海の後盾は消滅し、カンチェンネーは手持ちの勢力だけで東チベットの二カロンと対峙せねばならなくなったのである。清朝はカンチェンネーをカロンの筆頭とし、ボラネーをカロンに補任するなどカンチェンネーの立場を強化する措置をとったが、彼の権威は確立せず、カロン間の対立が激化したあげくクーデタにより打倒される。

## おわりに

ホンショート王国の発足当初、ダムのホンショート集団は、全青海ホンショートの軍事力を象徴する存在として西藏に配置された。その後、代替わりによる分割相続によりギャルポがホンショート部の本拠地青海において直接掌握するホンショート集団の規模は縮小したが、ダムの集団はギャルポの武力として、それ自体の軍事力に加え青海集団やダヤン系傍系集団、その他の系統の傍系王族などの後ろ盾を持つという状況に変化はなかった。ただしラサン体制の成立以後、ホンショート部の分裂は兵力を動員しあう激しい対立にまでエスカレートした。このような対立はラサン以前には見られなかったもので、ラサン体制にとって致命的な弱点であった。

データの一部欠落のため暫定的数値であるが、一七二一年の時点での兵力一を戸一に換算し、五家の一員スルジャが他家に匹敵する一〇〇〇戸を有したと仮定して、青海におけるラサン派、反ラサン派の勢力を比較してみると、ダヤン系、ドルジ系併せて五〇〇〇戸強となるのに対し、反ラサン派の五系統を合すると優に一万二〇〇〇戸を越え、反ラサン派が圧倒的に優勢である。ラサン派は清朝の介入によって辛うじてこれに拮抗した。彼らがジュンガルの侵攻によるラサンの滅亡を傍観せざるをえなかったのは、圧倒的な敵対勢力と対峙して兵力を西藏に回す余裕がなかったためであろう。

対立のきつかけとなったダライラマの選定が、カルサンギャムツォの即位という形で決着しても、反目の影響は尾を引いた。ラサンの後継者として選出された候補者が激しい拒否にあい即位できなかったのである。もし政治上の最高責任者としてのギャルポの存在があれば、ラサ政府はホンショート支配のもとで安定し、カロン間の対立が生じても内戦にまでエスカレートすることはなかったであろう。しかし実際にはホンショート勢力は内閣の一角を占めるにすぎず、その長カンチェンネーは対立する二派の当事者の一人として、クーデタにより殺害された。内戦をへて西藏集団



の政治的立場はさらに変化する。グシハン以来、西藏集団はホシヨート人指導者のみに従っており、ラサ政府を握るチベット人権力者から直接統制を受けたことはなかった。しかしここに到ってついにチベット人ボラネーの配下に組み込まれ、ラサ政府に従属する立場に置かれることになったのである。

ボラネーはラサンの旧臣としてその後も一七三〇年代初頭まではラサンの遺児を奉ずる態度を保っていたが、彼が翻心した時、それを咎めることのできるホシヨートの勢力はもはや存在しなかった。したがって一七二七年のカンチェンネー政権の崩壊をもって、ギャルポの固有の権力基盤の消滅、チベットにおける“ホシヨート支配”の終焉、ホシヨート王国の実質的な滅亡と位置づけることができよう。

## 略 語 表

### 一 史 料

- AT De Filippi. An account of Tibet, London, 1937.
- B5DL ngag dbang blo bzang rgya mtso: du ku lai gos bzang.
- B6DL sde srid sangs rgyas rgya mtso: rab gsal gser gyi snye ma.
- B7DL lcang skya rol pa'i rdo rje: dpag bsam rin po che'i snye ma.
- DG dkom mchog bstian pa rab rgyas: deb ther rgya mtsho.
- MBTJ tshai ring dban rgyal: mi dbang rtags brjod
- MC ngag dbang mkhyen rab: mu li chos 'byung, 四川民族出版社一九九二
- PSJZ sun pa ye shes dpal 'byol: chos 'byung dpag bsam ljong bzang.
- ラモンダ dirghāyu rindrajina 'i byung ba brjod pa zol med ngag gi rol mo” の漢文訳『噶倫伝』。多喀爾・

策仁旺傑 (mdo mkhar zhab drung tshe ring dbang rgyal) 著、周秋有訳、西藏人民出版社一九八六

青海史

suin pa ye shes dpal 'byor: mtsho sngon gyi lo rgyu

鉄虎清冊

dga' ldan pho brang ba'i chab 'bangs dbus gtshang dwags kon rong khag bcas kyi loags stag zhib  
gzhung dam 'byar mai zhal bshus dge 西藏藏文古籍出版社一九八九

ドリン伝

bstan 'dzin dpal 'byor: dga bzhi ba'i mi rabs kyi byung ba brjod pa zol med gtam gyi rol mo.  
四川民族出版社版一九八六

一統志

嘉慶重修大清一統志

允禩奏摺

奏稿・奏摺・奏議の総称

奏稿、稿

吳豊培編『撫遠大將軍允禩奏稿』全国図書館文献縮微複製中心、一九九一

奏摺、摺

撫遠大將軍奏摺(東洋文庫所蔵「奏摺檔」)

奏議、議

「撫遠大將軍奏議」『清史資料』pp. 159-196 第三輯 北京・中華書局一九八三

実録、実

清実録

同文志

欽定西域同文志

当雄宗調査報告

『藏族社会歴史調査』(三)西藏人民出版社一九八九、pp. 294-324

内府輿図

清乾隆内府輿地圖

年羹堯奏摺

年羹堯奏摺專輯 上中下、国立故宫博物院一九七一

表伝

欽定外藩蒙古回部王公表伝

方略、方

平定準噶爾方略

二 参 考 文 献

石濱一九八八—1

石濱裕美子「東洋文庫所蔵写本『撫遠大將軍奏摺』と『清史資料』第三輯所収『撫遠大將軍奏議』について」『モンゴル研究』No. 18 一九八八

石濱一九八八—2

石濱裕美子「ジュンガルのチベット侵攻前後における青海ホシヨトとジュンガルの協力関係について」『早稲田大学大学院文学部研究科紀要哲学・史学編』別冊第十四集、一九八八

石濱一九八八—3

石濱裕美子「清朝のチベット平定に対する青海ホシヨットの立場」日本西蔵学会々報 第34号 一九八八

石濱一九八八—4

石濱裕美子「グシハン王家のチベット王権喪失過程に関する一考察—ロブサンダンジン (blo bzang bstan 'dzin) の「反乱」再考—」『東洋学報』一九八八 3・4

石濱一九九二

石濱裕美子「摂政サンゲ・ギャンソの著作にみる一七世紀チベットの王権論」東洋史研究 51—2 一九九二

加藤一九八三

加藤直人「一七二三年ロブザン・ダンジンの反乱—その反乱前夜を中心として—」『内陸アジア・西アジアの社会と文化』一九八三

加藤一九八六

加藤直人「一七二三年ロブザン・ダンジンの反乱—反乱の経過を中心として—」東洋史研究 45—1

\* 以下の三点は『中世チベット史研究』（一九八六）所収の補訂版による。

佐藤一九六三

佐藤長「バクモドゥパ政権初期のチベット状勢」明代蒙古史研究

佐藤一九七三—1 佐藤長「ロブザンダンシンの反乱について」史林55—6

佐藤一九七三—2 佐藤長「青海オイラット諸部落の起源」東洋史研究32—1, 3

山口一九六三 山口瑞鳳「顧実汗のチベット支配に至る経緯」『岩井博士古稀記念論文集』

山口一九九二 山口瑞鳳「ダライラマ五世の統治権—活仏シムカンゴンマと管領ノルブの抹殺」東洋学報73—3

4

AG Luciano Petech. *Aristocracy and Government in Tibet 1728-1959. Serie Oriente Roma*

XLV 1973

CT Petech, L. *China and Tibet in the Early 18 century: History of the Establishment of*

*Chinese Protectorate in Tibet*. Leiden. 1st ed, 1950 2nd ed 1972

Note Petech, L. "Notes on Tibetan History of 18 century" *T'oung Pao* 52 1965-66

TPH Tsepon W. D. Shakabpa. *Tibet, A Political History*, New Haven, 1967

YPH chab spel tshe brian phun tslogs. bod kyi lo rgyus rags rim gyu yi pheng ba. bar cha,

bod ljongs dpe rnying dpe skrun khang, 1991

\* 清朝史料書名下の漢数字は巻数を、算用数字は丁数を表す。

注

2' p. 428

(1) 年羹堯、雍正二五月十一日付「条陳西海善後事宜摺」

(年羹堯奏摺(下) pp. 863f—869)° 「唐古特四大部落」

は西海、喀木、藏、衛。

(2) 青海史、555 山口一九六三、p. 750° 佐藤一九七三—

(3) MBTJ はサンギェギヤムツォ、ラサン、タクツェン、

カンチヤンネー、ボラネーのラサ政府の歴代支配者を王

(mi bdeag, mi'i bdeag po, bod rje) と称し、<sup>1)</sup>「昔王、歴代

のチンマール bod rje にあつたチンマールがギヤルボツ

う美称が広く用いられたが……(237a2-3)」とのべ、ラサ政府の関係者の中ではグシハン一族のみにギャルポの称号を冠している。本稿もこれに倣う。歴代ギャルポの称号は以下のとおり(Noté, B5DL なぎとよる)。

グシハン bstan 'dzin chos kyi rgyal po

ダヤン bstan 'dzin rdo rje rgyal po

〃 bstan 'dzin da yan rgyal po

グンチュク bstan 'dzin da la'i khan

テンジンワンギャル 称号なし

ラサン bstan 'dzin jing gir rgyal po

(4) 山口一九六三, p. 750。山口一九九二, pp. 125, 128

(5) 年羹堯、雍正二年五月十一日付「条陳西海善後事宜摺」

『年羹堯專輯』(下) p. 865 上 1. 23—ト 1. 5。

常寿、雍正元年九月二十四日付年羹堯宛滿文書簡(『年

羹堯奏摺』中 p. 729 上 6-7, 11-12)

(6) 本稿では青海、カムに対して中央チベットにガリを併せた総称として使用。

(7) ナクツァン↓バルジュルラブテン(稿十五16左)「ナク

ジョーホショート王族(MBTJ; 212a5) ホルカシ→チャ

ガンダンジン(MBTJ; 90b6-91a1)。

(8) 「徳格土司世譜」pp. 251, 255。任乃強『民族研究論文

集』民族出版社1990。

MC' pp. 22~。

(9) 元朝期に実在した「十三万戸」はウィ・ツァン内に偏っ

て分布している(佐藤「バクモドゥバ政權初期のチベット

状態」pp. 92-93, 山口一九六二, p. 770, ドリン伝 pp. 9-

10)。シャカッパは全国を区分する方法の一種とし「東は打

箭鐘から西はラダック国境までのチベット全土」と見なす

(TPH, pp. 2, 111)。ドリン伝にもガリのゴゴル、ウィツァ

ンの4ル、ドカムの6カンをあわせて13のティオルとする

説があることを紹介している(ドリン伝p. 9)。ただし著者

テンジンベンシヨル自身はこの説を誤りとみなしている。

(10) B5DL; Ka, 107b5-6, 284a1-2。107b のものには「ダラ

イラペ」贈ったとは記されていない。十三万戸の献上が

意味するところについて、シャカッパが全チベットの支配

権の献上とするのに対し、ツェブテンブシツォ氏はウィッ

ヤンの主権の献上としているようである(YPH; pp. 570-

572)。山口瑞鳳氏はチベットの統治権の献上とした上で、

その記事に疑念を表明している(山口一九九二)。

ローマ教皇のように、宗教的に高い権威を有する人物が

政治的影響力を発揮する例もあるので、政府組織の権限の

問題とは区別して考察すべきと思われる。

(11) 年羹堯、雍正二年五月十一日付「条陳西海善後事宜摺」

『年羹堯專輯』(下) pp. 865 下—866 下。

(12) CT, CHAPTER TWO。

(13) Aはグシハンの子の世代、Bは孫の世代、数字は兄弟内の

排行を示す。PSJZの系図の欠落部分はDGより補って( )と、◇内に示した。◇はsog poi yig

tslang を示す。

- (14) 康熙五十四年十二月壬午(方三6左—7右、実二六六17右)。

- (15) 以下ホシヨート王族の兵力に言及する場合、全てギャルポ後継候補者の選定に関する延信の報告書(康熙六十年二月二三日)記載の一七二二年段階の数字を用いる。稿十四25右—30右。

- (16) 以下ホシヨート王族の戸数に言及する場合、すべて「青海蒙古族社会調査」(『青海省藏族蒙古族社会歴史調査』青海人民出版社一九八五)記載の一七二四年段階の数字(「戸口約数 初編」)を用いる。pp.140-144。

- (17) MBTJ: 116b1°。

- (18) 康熙五十三年六月乙亥(実二五九4左)。またスルジヤの青海派遣と同時に行われた長子ガルドンジン AIBI C2D1 のイリ行きが一七二四年であること(石濱一九八八—2°, p.203) 244°。

- (19) Note; p.268 (5)°。

- (20) 青海史<sup>7</sup> 7b4 DG, 64b6 CT, pp.10-11°。

- (21) 青海に投ずる以前はガルドンの伯父チョクル・ウバシの奴僕だったとする。

- (22) このような行為としては、以下のようなものをあげるこ  
とができよう。丸で囲った数字は、本文九七—九八頁で王  
公名の左に附している固有の番号で、その行事への参加者  
を示す。

イ、ツァンヤンギヤムツォの転生者を求めてカルサンに接  
触⑭⑦⑩ (19a6-b1)°。

ロ、一七二四年、デルゲに移ったカルサンギヤムツォに  
審査と祝賀の使者を派遣⑭⑦⑫⑬⑭⑮⑯ (23a1-3)°。

ハ、一七二四年、青海王公の招待に応じて青海に向かうカ  
ルサンを出迎え⑤⑪⑫⑬⑭⑮⑯ (23a2-3)°。

ニ、一七二五年、清国がアチトクを派遣してカルサンギヤ  
ムツォを委ねるよう求めたのに対し、右翼の長たちに派  
遣されて免除を請う使者となった者⑭⑮⑯ (24b3-4)°。

ホ、一七二四年十二月カルサンギヤムツォに礼拝⑮⑦⑨  
⑮④②①② (26a3-4)°。

ヘ、一七二五年、カルサンギヤムツォがクンブム寺へ向か  
う途上、カルサンの訪問と礼拝の納受を請求①②④⑤

⑦⑫ (26b4-5, 27b1, 27b4, 28a1-3)°。

ト、カルサンのほうそうが癒えるまでクンブム入りを延ば  
すことを求める決定に賛成④⑦ (29a3-4)°。

チ、上記の決定を皇帝に伝達する使者②⑮ (29a5)°。

リ、クンブム入りしたカルサンを礼拝①③⑥⑧⑮ (36a3)°。

(23) PSJZ はツェリンラブテンに作る。DG により修正。

(24) A7B4C1 45 PSJZ<sup>7</sup> DG とともにテンジンラブテンに作  
る。ホへではロサンテンキョンの名で登場。ホでロブサン  
ジンジン A10B2 と共に現れる。石濱氏は⑧に比定。

(25) 同名の A3B2 は一七〇六年に自殺(佐藤一九七三—  
2°, p.471) してゐるので別人。ロサンテンキョンラブテ

ンがロで派遣した使者であらう。

- (26) ロブサンダンジンの母アルタイカトンの妹婿(方十三25右)。

- (27) 不詳。右翼に属す。

- (28) 不詳。右翼に属す。グシの第六子ドルジAgはこの称号を持つが、一六九〇年に死去。

- (29) 和寧「西蔵賦」図考八31右、衛蔵通志十五21右など。

- (30) 一九五八年のダムは、総計一五〇〇戸一二〇〇〇名が八つの部落にわかれ、各部落がそれぞれ「甲本 bgya dpon (百戸長)」を戴いていた(「当雄宗調査報告」p.310)。戸数と百戸長の数が食い違っており、実際の戸数とは別に、百戸が各部落を単位とした行政組織として存在していたことが伺える。三つの百戸がいつ増設されたかについて、一七五一年に清朝が西蔵集団を支配下に組み込んだ際、「頭目」八人がおり、清朝はそれぞれを「固山達 baga da (旗長)」に任じている(乾隆十六年三月乙丑、実三八五18右)。またボラネー時代(一七二八—一七四七)には八〇〇名のホシヨート騎兵隊があった(西蔵記、上23右)。こらはいずれもその時に八百戸制がすでに存在していたことを示唆するものである。よって三つの百戸の増設はそれらに先立つカンチェンネー期(一七二〇—一七二七)に行われたものと思われる。その起源の第一の可能性は、ガルトク駐屯部隊である。第二の可能性は、清朝の青海征服によって生じたホシヨート難民である。「調査報告」は八つの

部落の成立に先立って、西康や安多から多くの牧戸が移住したという伝承を述べている(「当雄宗調査報告」p.294)。また実録にはこれに対応する次のような記事がある(雍正九年八月丁酉、一〇九3右)。

而黃河以南蒙古、畏避賊鋒、投奔近辺番夷之地。

- (31) AT, p.82. 稿二27—28左は「換防」とする。

- (32) MBTJ, 22b3-4.

- (33) MBTJ (12a6, 13a2) はタシルンボ寺、ラダック王統記(p.59) はガンデン寺の僧とする。

- (34) MBTJ は新妻の顔を見せにきたとす(117b6-118a1)。AT はジュンガルの侵攻を警告にきたとする(pp.154-155)。

- (35) 康熙五十七年五月丁巳、方五—左・五月戊午、実二七九2左—3右。

- (36) スルジャの属人。スルジャの従者として西蔵を訪問中、ジュンガルの侵攻にあい捕虜となる。註(49)の捕虜移送隊②の捕虜としてイリへ向かう途上脱走に成功、青海に帰還する(稿六12左—15右)。その後チャンマルを戴いて青海集団をまとめ、清国より散秩大臣に任ぜられる(稿十八35右—左)。

- (37) 流刑については本文二〇五—一〇六頁及び注(45)。

- (53) 投獄については本文二一〇頁参照。

- (38) Note, p.278.

- (39) 漢文版、蒙文版の表伝九二より。

- (40) 同文志二四3左—4右。
- (41) B7DL, 74b2. 稿十七7右。B7DL ではこのとき称号「ダイチンバートル」が与えられたとするが、允禩奏摺は「代請、巴圖爾、名号、賞蟒袍、元狐冠並帶子等物…」とあり、この段階では申請しただけに過ぎない。
- (42) ドリン伝、p. 21。鉄虎清冊、rgyal rtse khul gyi zhih gzhung, p. 464。
- (43) 康熙五十六年八月壬午、方四30左、実二七315左。
- (44) 『巴音塔拉盟史資料集成』一九四二、p. 42, f. 2, ll. 14-20
- (45) ダワザイサンはラサンが一七二〇年に青海、カムを視察させた巡察団に参加し(MC, p. 62)。リタンではカルサンギヤムツォの確認を行( L7DL, 18a ll. 5-6)。ギヤルトンではムリの領主の支社から、叛徒を処断するよう求められてゐる(MC, pp. 62-63)。
- (46) ①に関する証言：噶布楚喜拉布那木扎拉ほか三人。稿二14右。
- (47) ②に関する証言：扎木楊扎木巴、稿二27左。巴雅爾、稿二28右—左。同、稿二28左—29右。車凌端珠克、稿三26右。車凌扎布・巴圖蒙克、稿六12左—13左、摺二31左—32右。扎什白啦・桑達爾轟、稿七11右、摺三43左。
- (48) ③に関する証言：塔爾蘇海、稿一24右—左、議 pp. 170-171。
- (49) ④⑤の出発に関する証言：端多布佳木錯、稿四18右—左。車凌端珠克、稿三26右—左。
- (50) ④に関して：于二、稿七21右—左、摺四13右—左。拉木扎木巴・扎克巴扎木蘇、稿七24右—左、摺四18左。第巴・阿爾布巴、稿七32左—33右、摺四33右—左。延信、稿三十四30右。
- (51) ⑤に関して：中鄂來、稿六10右、摺二26右—左。扎什白啦・桑達爾轟、稿七9左—10右、摺三41左—42右。扎什白啦・桑達爾轟、稿七11左—12左、摺三45右—左。
- (52) ⑥に関して：烏巴什車臣桑桑、稿八30左—31右、摺五39右—左。胡爾敦、稿十三13左—14右、摺十45左—46右。
- (53) 杜拉爾倭木布の証言(稿七28左—29右、摺四26右)。警備兵六十人、その長は達爾扎布、主な捕虜、杜拉爾台吉。康熙五十八年十二月にガルトクでカンチェンネーにより騙し討ちに合い、達爾扎布と三人を除き一行は全滅。警備兵の数、生き残った警備長の名などは⑥の隊と類似。
- (54) 注(50)を参照。
- (55) 石濱一九八八一、p. 15-17、注(10)。
- (56) AT, pp. 164-166。
- (57) 稿十三15右—16左、摺十48—51左、稿十三17右—18右、摺十一1右—3右。
- (58) カンチェンネーの妻二人は一七二七年のクイデータの際、ラサで殺害されている。
- (59) MBTJ では、ガリ部隊の一部を率いてボラネーの指揮下にはいったようにえがかれている。
- (60) 'khor du ma kha'a, kor dum kha'a。MBTJ では「キ



ンガルと三域の軍」の指揮官の一人として 1715-3-2、

北京への使者として 183a5 に登場。允禩奏摺では西寧への使者として登場（稿十三13左、摺十45右）。

(61) 加藤一九八三、石濱一九八八—4。

(62) 「ことがおわつてのち、一切のことはもとのおりにすむ」加藤一九八三、pp. 338。『年羹堯奏摺』（上）、p. 724, II, 13-14。

(63) 「取」土白武国、将爾等内立汗」加藤一九八三、p. 329 『宮中雍正檔』p. 165。

(64) 以下の経過は、エルデニエルケトクトネイの稟文（康熙六十年正月二日、稿十三11左—12右、摺十42右—43右）および延信の報告書（康熙六十年正月二三日、稿十四19右—23左）に基づく。

(65) 康熙六十年三月十二日、稿十六1左—4右。

(66) 康熙六十年五月四日、稿十七12左—13左。

(67) 康熙六十年二月二三日、稿十四26右—26左、稿十四30左—31右。

(68) 石濱一九八八—2はラサンに敵対する傍系王族とジュンガルとに協力関係があったという推測を示しているが、それを裏付ける証拠の証言がある。ロブサンダンジン A10 B2 の証言（稿九3右—3左）、テンキョン ASEIC1 の証言（稿三38右—39右）。チャガンダンジンがジュンガルと連絡をとり、まずラサンを打倒して西藏を占拠し、ついで「呢堪 nikan（＝清朝）を攻撃する計画を立てていたと

か、バルカムの鉄を贈ったと告発している。

(69) 佐藤一九七三—1、p. 403—404。

(70) 加藤一九八三、pp. 330, 333 注(39)、佐藤一九七三—1, p. 406。

(71) 康熙六十年二月二十三日、稿十四19左—32右。

(72) 康熙六十年二月二十三日、稿十四23左—30右。

(73) 康熙六十年二月二十三日、稿十四31左。

(74) 康熙六十年二月二十三日、稿十四31左—32右。

(75) 稿二十七右—8左、議 pp. 194-195。

(76) 雍正九年八月戊申、方二五16左—18左。

(77) 佐藤一九七三、p. 409。年羹堯、雍正二年五月十一日付「条陳西海善後事宜摺」『年羹堯專輯』（下）p. 365

(78) 稿一25左・議 p. 171。にも登場。

(79) 稿十一8右—左にはラサン属下のタイジ「吹木珠爾」として名が見える。

(80) 年羹堯、雍正二年五月十一日付「条陳西海善後事宜摺」年羹堯奏摺（下）p. 864 下左。

(81) 注(15)、(16)に見える数字を王族の系統別に分類し合計したものである。兵力、戸数両方の数字が揃っている王族については、兵力の数を用了。

(82) 一七—六年、反ラサン派のチャガンダンジン、ロブサンダンジンらがカルサンギヤムツォを擁して西藏へ進撃する手始めとしてラサン派「五家」を攻撃しようとした。清朝は彼らを威嚇して実力行使を中止させ（康熙五十四年十二

月壬午、方三六左―七左、実二六六右―18右、「青海兄弟諸台吉」の争いの原因であるカルサンギヤムツォを取り上げて、ラサン派からは左翼のアラブタンオンボ、右翼のダヤンを、反ラサン派からは左翼のエルデニエルケトクトネイ、右翼のロブサンダンジン、チャガンダンジンを左翼、右翼の支配者にて、両派の「永遠和睦」を期待した（康熙五十五年閏三月巳卯、方三21左―22左、実二六八5右）。

補注

※チベット人の祖先とされる伝説の「四大氏族」の解説、著者

の父ドワンパンディタ||ゴエドゥプラフテンが、バーセルナンの最新の転生者であることの「証明」に続けてカンチェンネーの事蹟の描写がはじまっている。五八四頁十七―十八行には、著者とその父をチベット人だと述べているようにも解釈しうる一節がある（『白館戒雲氏の教示による』が、その一節は「生地をチベットとする者」とも読める。

※※主として Tetsuo MORIKAWA: On the Documents of the K'ang-Hsi Period of K'oke Qota-yin T'umed Qosigu (the T'umed Banner of K'oke Khota). The Fifth East Asian Altaistic Conference, Taipei, 1980, p. 134 © 英訳に依った。